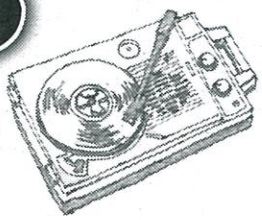
週刊ポスト 2018.3.25(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

第28回 タイガースとフォークルの不思議な縁

堀井六郎
絵・松本 浦



私の音楽史の中で昭和42年という年は、舟木一夫の『ブルートランペット』や、西郷輝彦の『初恋によろしく』（森田健作につながるフォーク調青春歌謡の名作）で始まりました。

「御三家」人気がまだ続く中、2月に発売されたザ・タイガース『僕のマリー』の登場で当時の少年少女同様、私の嗜好は歌謡ソロ歌手からGS（グループサウンズ）へとシフトチェンジ、5月に発売された若さ弾ける第2弾シングル『シーサイド・バウンド』で、その傾向は決定的となり、GSは勃興期から絶頂期へと突入します。

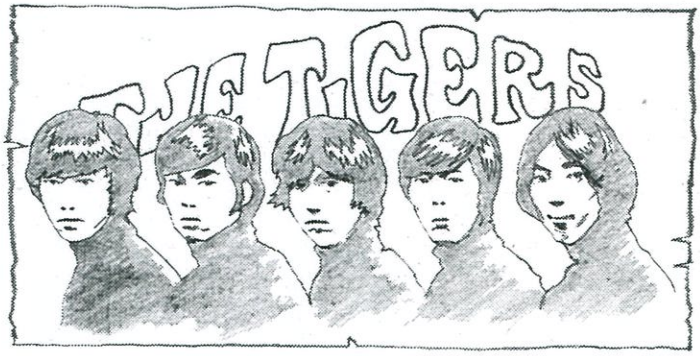
ひと夏越した同年秋、10月から始まった若者向けのラジオ深夜放送『オールナイトニッポン』がGSやカレッジ・フォークの新曲をいち早く流すことで、和製バンドと深夜放送の人気上昇に相乗効果をもたらします。

そうした状況の中、11月中旬だったでしょうか、関西からやって来た世紀の珍盤、ザ・フォーク・クルセダーズの『帰って来たヨッパライ』がパーソナリティーの高崎一郎によって紹介されると、人気は即爆発、年末の12月25日に急きょシングル盤が発売されます。

放送当日、生で聴いていた一人として、テープの早回し自体はすでにチップマンクスのビートルズソングや『ミニ・ミニ・ロック』といった洋楽曲（木の実ナナもカバー）で体験済みだったので驚きは少なかったのですが、前代未聞ともいえる歌詞、パロディーのごった煮、遊び心にはあっけに取られました。

フォークルの誕生はその前々年、東京から京都に転居してきて間もない加藤和彦の呼びかけによって結成、翌昭和41年4月頃からは4人のメンバーでライブ活動をするようになり、次第にその名を知られるようになります。

タイガースの母体となった「サリーとプレイボーイズ」が結成されたのも同じ京都で時期も同じ頃でした。中心メンバー（瞳、森本、岸部）の三人は市立北野中在学時の同級生仲間で、結成時はフォークルの中心メンバー同様、18歳でした。北野中時代、一学年下には、のちにフォークルの結成メンバーとなり、『帰って来たヨッパライ』で歌声が聴かれる平沼義男なる人物もいました。



アマチュア時代のフォークルメンバーで世の中に知られていない芦田雅喜と平沼は府立山城高校の吹奏楽部OB、タイガースの瞳と年下の加橋は山城高校の夜間部出身でした。フォークルが大阪の「ナンバ一番」に出演したときトリを務めていたのが、ボーカルに沢田研二を加え名前もファニーズと一新していた瞳たちのバンドです。ファニーズがプロデビューのため上京する際、フォークルの北山修は「ナンバ一番」の楽屋で瞳を見送りました。

『ヨッパライ』から半年後、フォークルが覆面バンドのGS、ザ・ズートルビー名義で発表した『水虫の唄』の冒頭の歌詞はタイガースの『モナリザの微笑』のサビと瓜ふたつです。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある